

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

タイトル＝「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

原稿枚数＝27枚(40行×20字換算：本文1061行)

10行×20字換算で107枚

別に、あらすじ等、このページ含み3枚

著者名＝鎌田 勝浩(かまだ かつひろ)

E-Mail：kamada@sh.rim.or.jp

『自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか』 あらすじ

鎌田勝浩 作

高校生の主人公、筑波博(ハチ)は、ある日、等身大人型ロボットを完成させる。ソノミと名付けたそのロボットを、自宅地下の研究室で訓練する博。最初は満足に動けなかったソノミだが、訓練の甲斐あって、普通に活動できるまでに成長する。

そんな訓練の日々のある日、放課後の学校で不思議な夢を見る。年上の見知らぬ女性、園美と会っている夢だった。

親友の大穂穰(ハル)に冷やかされながらも、自らの疑問に気付く博。今の博には、ロボットを作る能力なんてあるはずがなかった。なぜ作るのか？そして、ロボットと同じ名を持つ女性是谁なのか。謎は深まる。

ある日、博はソノミと外出する。街中を案内するうちに、突然ソノミは山へ行きたいと言い出す。

翌日、その山に向かう一行。山道を歩くうち、博はもう一つの自分に気付き始める。記憶通りの場所にあった謎の洞窟。

ソノミと自らの意思により、洞窟に入ると、秘められた過去が蘇る。真実の記憶に触れる博。

気がつく博(ハチ)は病室にいた。今までの世界は、実験中の事故により昏睡状態にいた博の、心の中の世界だった。

ロボットのソノミは、実は博が現実世界で開発していたロボットの、精神世界での再現だった。また、SONOミ改(元になった精神同調装置 SONOミ)はロボット開発のために博が開発)を使って博の心の中に潜入した、桜園美(ハル)のその世界での仮の姿でもあった。

大穂穰(ハル)が事故の真実を語る。
やがて、園美が目覚めます。

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を
見るか

脚本 鎌田勝浩

登場人物

筑波 博(つくばひろし・32, 22, 17)

ソノミ(ロボット)

桜 園美(さくらそのみ・32, 22, 17)

大穂 穰(おおほみのる・32, 17)

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

○ 博(㉮)の自宅地下の研究室

* ロボットの目から見た映像、視点固定
真つ暗な映像。直後、中心に白い点が現れ、素早く全体に広がり真つ白な映像にやがて輪郭線のための映像が現れ、徐々に落ち着いて通常の映像になる

天井の映像。天井と蛍光灯が見える。

音声が入り込んでくるが、最初はモガモガしてうまく聞き取れない。音声と同時に、各種機械の動作音も聞こえ出す

博(㉮)「…電圧正常。起動を確認。各部チェック…問題なし、と」

博「目は開いてる…うまく動いているみたいだな」

手を振って

博「おい、わかるか？」

少し見つめた後、視野から外れる

博(㉮)「視覚、聴覚、反応は…あるみたいだな。ここまでは○×…よし、なんとかうまくいったみたいだな」

* ロボットの目から見た映像ここまで
殺風景な研究室。窓はない。機械がたくさんおいてある部屋。真ん中に、作業台があり、その上にロボットが仰向けで寝かされている。

ロボットには頭にヘッドギアのような機械をつけていて、そこから何本ものケーブルが伸びていて、そばの機械につながっている

その周りで、各種の機械の表示を読みながら動作のチェックをしている博(㉮)

○ 【オープニングロール】

オープニングロールの背景映像

音声はなし。BGMのみ

以下の短いシーンの連続・博のみ登場
ロボットの腕(だけ)を組み立てている風景

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

脚(だけ)を組み立てている風景
パソコンのような機械に向かって会話している風景。マイクとカメラがついていて、画面には仮想的な顔の映像が表示されている

腕単独の動作試験風景。掌を開いたり閉じたりしている

脚単独の動作試験風景。座ったような姿勢で、膝の曲げのばしをしている

パソコンのような機械に向かって会話している風景その2。うまくいかないらしい

肩から腕(のみ)の目的動作訓練風景。

卓上のボールをつかもうとするが、なかなかうまくいかない

腰から下(のみ)の歩行訓練風景。ふらふらしてすぐに転ぶ

パソコンのような機械に向かって会話している風景その3。そこそこうまく会話が成立しているらしい

○
【タイトル画面】

○ 博の自宅地下の研究室

博がロボットのそばでロボットを見つめながら

博 「よし。ソノミ、わかるか？」

ソノミ(ロボット)、何か言おうとするが、言葉にならない

博 「うん。まだ発声装置に慣れていないようだな。大丈夫、直ぐに慣れるから」

ソノミ、なんとか話せるようになってくる

ソノミ「うん、あつ、あつ」

ソノミの顔のアップ。無表情で

ソノミ「あゝ。(ぎこちなく) こんにちは。

私の名前はソノミです」

元の視点に戻って

博 「よし。上出来だ」

ソノミ「(ぎこちなく) ヒロシさん、です

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

か？」

ソノミ「(機械的な声で)ヒロシ。ツクバヒロシ。コウコウ2ネンセイ。」「サイ。ワタシを作った人」

ソノミ「ヒロシ。ワタシ、どうした、ですか？」

博「ソノミは、体を手に入れたんだ」

ソノミ「カラダ？」

博「そうだ。いままではソノミには体がないかった。今、ソノミには体がある」

ソノミ「カラダ、アル」

博「動けるか？体、動かしてみろ」

ソノミ「ヤッテミル」

ソノミ、動こうとするが、バタバタするだけで、うまく動けない
激しくバタバタし出す

博「まずい、フィードバック制御がうまくいってない。筋力制御リミッターを強化しなければ」

博、そばの機械に飛んでいき、スイッチを操作する

ソノミ、落ち着いてくる

博「よし、落ち着いてきた」

ソノミ「ワタシ、ドウシタ？」

博「まだ、新しい体に慣れていないんだ。大丈夫、訓練すればすぐ慣れて、うまく動けるようになるから」

ソノミを起こして作業台に座らせる

ソノミの頭の機械を外してやる

ソノミ「クンレン、スル？」

博「そうだ。お前の体は、普通のロボットとは違ってプログラムで動いているのではない。ニューラルネットを応用した人工小脳で動くように作られている」

ソノミ「ニューラル、ネット？」

博「プログラムの代わりに、人間みたいに実際に動いて動きを学習するんだ。だから訓練が必要なんだ。訓練すれば、どんどんうまく動けるようになる」

ソノミ「ソノミ、ヨクワカラナイ」

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

博 「はっはっは。そうだな。今のソノミには、まだわからないか」

ソノミ 「まだわからない」

博 「大丈夫だ。おいおいわかるようになる」

ソノミ 「ソノミ、おいおいわかるようになる」

博 「そうだ、ソノミ。訓練するぞ。動きも

そうだが、会話もだ。そうすればそのうちに普通に生活できるようになる」

ソノミ 「ソノミ、クンレンする。ソノミ、ガンバル」

ソノミの顔のアップ。一瞬、口元に笑みを浮かべるが、すぐもとの無表情に戻る

博 「そうそう、忘れてた」

姿勢を正して

博 「物理法則の支配する世界へ、ようこそ」

○ 博の自宅地下の研究室

ソノミ、Ｔシャツ程度のとりあえず何か着ているだけと言う軽装で、作業台の前の椅子に座っている。側に博がいる

博 「よし、じゃあ次はこのボールを掴んでみようか」

ソノミ 「ソノミ、ボール、つかむ」

作業台の上のボールを掴もうと、手を伸ばすが、少しずれた空間を掴もうとする腕が安定しない。ふらふらしている

ソノミ 「ソノミ、ボール、つかめない」

博 「大丈夫だ。落ち着いて。さ、もう一回やってみようか」

ソノミ 「ソノミ、もう一回やってみる」

ボールに手を伸ばすがまだ掴めない。さっきよりは近づいた

博 「大丈夫だ。もう一回」

○ 博の自宅地下の研究室

作業台の上に積み木が散らばっている
ソノミはその前の椅子にすわっている

博が側でサポートしている

博 「さあ、今度はこの積み木を掴んで、あの、四角い積み木の上に載せてみようか」

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ソノミ「ソノミ、のせてみる」

ソノミ、手に持った積み木を、目の前の四角い積み木の上に積もうと持ってくる。載せたかと思ったが、手を離すとまっすぐ載っていなかったので崩れてしまう

博「うーん、惜しいな。ちゃんと垂直に立てないと崩れてしまうよ」

ソノミ「ソノミ、もう一回、やってみる」

博「よし、偉いぞソノミ。じゃ、もう一回やってみるよ。じゃ、やってみようか」

ソノミ、積み木を掴むと、もう一度四角い積み木の上に積もうとする。今度こそ、と思ったが、少しずれていたのでは崩れる

博「うーん、惜しい。ソノミ、じゃ、もう一回やってみよう」

ソノミ「もう一回、やってみる」

○ 博の自宅地下の研究室

片付けられた広めの空間

ソノミが博に支えられて立っている

博「いいか？じゃあ、手を離すよ」

博がそつと、ソノミから手を離す

ソノミ、ふらふらしながら、何とか立っている

博「いいぞ。じゃあ、少し歩いてみようか」

ソノミ「ソノミ、歩いてみる」

博、ソノミの片手を取って支えながら、ついて歩く

博「じゃあ、右足からいくよ。右足を前に出して」

ソノミ「右足、前に出す」

ソノミ、ゆっくりと右足を上げて前に踏み出そうとする。ふらふらしている。

博「いいぞ、その調子」

ソノミ、右足を着地する。少しふらつく

博「おっと。よし、いいぞ。じゃあ、次は左足だ。左足を前に出して」

ソノミ「左、あし、だす」

ソノミ、ゆっくりと左足を上げて前に踏

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

み出そうとする。ふらふらしている

博 「そうそう、その調子」

ソノミ、左足を着地。少しふらつく

博 「落ち着いて。その調子。じゃあ次は右足だ」

ソノミ「右、あし、だす」

ソノミ、ゆっくりと右足を上げて前に踏み出そうとする。ふらついている

博 「いいぞ、その調子」

ソノミ、右足を着地。少しふらつき、崩れ、博にそのまま倒れ込む

ソノミ「きゃっ」

博 「おおっと、危ない」

博、慌ててソノミを体で支えようとする

* * *

フラッシュバック

夕方、土手の上の小道で、同年代の女の子が倒れ込んでくる映像。ただし、女の子の顔は、影になっていて見えない。

* * *

博 「！」

博、一瞬、動きを止めて驚く
はっと我に返って

博 「ソノミ、大丈夫か？」

ソノミ、博に倒れ込んで、二人して床に倒れている

ソノミ「ソノミ、ダイジョウブ？」

博、笑顔で

博 「その分じゃ、大丈夫みたいだな」

ソノミを起こしつつ、立ち上がって

博 「よし。じゃあ、続けるぞ」

ソノミ「ソノミ、つづける」

博、笑顔で

博 「良い心がけだ。じゃ、もう一回」

ふらふらしながら歩行訓練を続ける

博 M「それにしても、今のは何だったんだろう。記憶にはないようだが…」

○ 【アイキャッチ】

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

。 バーのカウンター（夜）

暗転

園美（22' off）「…ひろし、ひろし…」

博（22）「カウンターに突っ伏して眠っているところで目を覚ます。寝ぼけて軽く辺りを見回す。」

博 「ん？なんだ？ここ、どこ？」

博と園美、バーカウンターで隣同士で座っている。ただし、園美の顔は、良く見えない

園美「信じられない。デート中に居眠りするなんて」

博 「仕方ないだろ。最近忙しくてあまり寝てないんだ。ついうとうとしてしまった」

園美「だからって、私とのデート中に寝る？そんなに忙しいの？大学院生って？」

博 「ごめんよ、園美。来週の学会発表の準備で今、忙しいんだ。なんとか時間を作って出てきたんだぜ。勘弁しろよ」

園美「学会、って、確かロボット工学だったよね。あなたのやってたのは。院生になつたばかりで発表することなんて、あるの？」

博 「そりゃあ、お前のように新入社員じゃ大したことは出来ないだろうけど、俺の場合結構、研究の評価が高いんだぜ。教授の受けも良いし」

園美「どうせ新入社員は社員研修位しかやることはありませんよ」だ。そんなに忙しいんだったら、いいわよ。私、帰るから。研究でも何でもやれば良いでしょ。（茶目っ気ばく）じゃあね」

園美、席を立って一瞬、笑顔を見せて素早く去る

博、立ち上がって園美が去った方向を見て

博 「へ、なにそれ？ちょっと待てよ。園美、そのみっ！」

博M「そのみ？園美って誰だ？」

。 実相高校の教室（夕方）

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

放課後の教室。博(㊦)と大穂穰(㊧)の二人だけがいる。博は自分の机に突っ伏して寝ていて、穰はその側の机に腰掛けている

博 「(寝言で)そのみ、そのみ…」

穰、博を揺さぶって起こす

穰 「おい、博、ひろし、起きろよ。もう帰ろうぜ」

博、目を覚ます。

博 「ん？ああ、もうこんな時間か。帰んなきゃな」

穰 「おい、どんな夢見てたんだ。そのみ、っていったい誰だ？(皮肉っぽく) お前の彼女か？」

博 「(慌てて) え、何言ってるんだよ、お前。そんな訳ないだろ」

穰 「はははっ、そうだよな。お前になんか彼女なんて出来るわけないよな」

博 「(少し怒って) そっすう言い方はないだろ」

穰 「ははっ、すまんすまん。そっすいえぼどこかで聞いたような名前なんだよな、そのみって。… あ、思い出した。お前が作っているっていうロボット、あれって、ソノミって言わなかったっけ？お前の寝不足の元凶が」

博 「ロボット？あ、あれか」

博 M「どこかで聞き覚えがあると思ったら、あのロボットの名前だったか」

博 「ああ、確かにソノミって名前だ。しかし、さすがに耳が早いな、お前は」

穰 「何だ、本当に作ってたんだ、ロボット。あの噂は本当だったのか」

博 「おい、穰、かまかけたな。」

博、穰に殴り掛かるまねをする

穰 「よせ、よせ、博。はははっ」

博 「ははははっ」

穰 「しかし博よう、なんでお前、ロボットを作るなんて、そんなこと出来るんだ？あんなもの、ちよつとやそつとじゃ出来る訳

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ないだろう。大学とか大企業とかの研究所とかじゃないと、無理なんじゃないか？普通は」

博、一瞬はつとずるが動じず

博 「ま、俺の作っているのはそんな大それたもんじゃないからな。簡単なもんさ」

穰 「ま、どっちでも良いけどな。さ、帰ろうぜ」

。 博の自宅地下の研究室（回想）

博、パソコンのような機械に向かって設計図を書いている

博M「確かに、俺がロボットの作り方なんて知っているはずない。確かに興味はあるけど勉強したことなんてあるわけがない。だけど、知っていた。それを知っていることも知っていた」

* * *

博、ロボットの胴体、腕、脚、頭を組み合わせて組み立てている

博M「当たり前のように、知っていた。何の苦もなく、設計し、組み立てることが出来た。まるで、一度それをやったことがあったかのように。だが、そんなことはあるはずがない。高校生がロボットなんて作れるはずがないじゃないか」

* * *

博、ロボットの起動前の最終チェックをしている

博M「そもそも、どうしてロボットなんて作るうと考えたんだ？そんな理由なんてないはずなのに。気がついたら当然のようにそれを始めていた。なぜだ？」

* * *

博、パソコンのような機械に向かって、カメラとマイクを使って会話している。

画面には仮想的な顔の表示

博M「それに、どうしてあのロボットに、ソノミなんて名前を付けたんだろう？なぜほかの名前でなく。どんな名前をつけようか

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

と考えることもなく、当然のようにそう呼んでいた」

* * *

画面の仮想的な顔のアップ

博M「ソノミって何だ？」

○ 実相高校の校庭（夕方）

博、穰と下校途中。校庭には数人の生徒の影

博M「そういえば、あの夢に出てきた年上の女性。確か、園美っていったよね。なんで俺、名前を知ってたんだ。知らない人なのに。そしてなんでロボットと同じ名前なんだ？」

穰「おい、博、ひろし？大丈夫か？何ボーッとしてるんだ？」

博、ハッ和我に返って

博「ん？ああ、まあな」

穰「今日のお前、変だぞ？大丈夫か？じゃあ、また明日な」

博、穰と別れる

博M「でも、なんだろう。とても懐かしくて、愛おしく感じる。そして、何かこう、苦しい気持ちも……」

○ 博の自宅地下の研究室

ソノミ、トレーニングウェアのような動きやすい服装で、作業台の前の椅子に座っている

博「よし、ソノミ、次はこの積み木を積み上げてみよう」

作業台には積み木が結構高く積み重なっている

ソノミ「うん、これだね。ちょっとむずかしいかな？」

ソノミ、積み木を手に取り、そっと、積み重なっている上に載せる

ソノミ「よ、っと。こんな感じかな？」

博「うまいうまい。じゃ、つぎはそれだ」

ソノミ「はい、これだね。いくよーっ」

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ソノミ、積み木を手に取り、そつと一番上に載せる。が、直後、バランスを崩して全体が崩れる

ソノミ「あ、あああつ、ダメダメっ。あーあつ、崩れちゃったあ」

博「あー、惜しかったね。全体のバランスを考えなきゃ。じゃ、気を取り直してもう一度やってみようか」

ソノミ「はい。ソノミ、もう一回やってみまーす」

ソノミ、台の上の円柱形の積み木に手を伸ばし、それを掴む

* * *

フラッシュバック

バーのカウンターの上のグラスに手をかける女性の手元の映像

* * *

考え込んでいる博

ソノミ(off)「ひろし? ひろしい! これでいい? 次はどれにする?」

博「あ、ごめん。じゃ、次はそれね」

。 博の自宅地下の研究室

片付けられた広めの空間

ルームランナーみたいな機械の上でソノミが歩いている。側で博が見ている

ソノミ「いち、に。いち、に。…」

博「だいぶうまくなったな。ソノミ」

ソノミ「うん。ソノミ、うまくなった」

博「じゃ、少し速くしてみようか」

ソノミ「うん、いいよ。速くしよう」

博「じゃ、速くするよ。いいかい?」

博、側の機械を調整して、歩行速度を上げる

博「これでどう? まだ大丈夫?」

ソノミ、さつきより速く歩いている

ソノミ「まだまだ大丈夫だよ」

博「よし。じゃあ、少し走ってみようか」

ソノミ「はい。ソノミ、走りまーす」

博、側の機械を調整して歩行速度をさら

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

に上げる

ソノミ、軽く走り始める

ソノミ「はい、はい、はい、はい……」

博「よし、うまくぞつ。本当にうまくなったな、ソノミ」

ソノミ「うん、うまくなったでしょ。ソノミ、頑張ったから」

博「よし。じゃあ、そろそろ一休みしようか」

ソノミ「はい。一休み一休み」

博、側の機械を操作して、歩行速度を0にする

ソノミ「あーっ」

ソノミ、急に止まったのでふらついて転ぶ

博（おっと）「危ないっ」

博、咄嗟にソノミに駆け寄って、ソノミと一緒に倒れる

* * *

フラッシュバック

部屋の中で、女性（園美（22））が倒れかかる映像。ただし、顔はぼんやりしている。この後、何かありそうな、少し艶っぽい映像

* * *

博、ふと我に返る。博の上にソノミが倒れ込んでいる

ソノミ「博？ひろし？大丈夫？」

博「あ、大丈夫。大丈夫だ」

ソノミ、博から立ち上がった

ソノミ「ごめんなさい。ソノミ、ドジっちゃった。大丈夫ですか？」

博「大丈夫だ。じゃあ、少し休憩だ」

博、立ち上がって側の椅子に座る

ソノミ（off）「ひろし？これ、何？」

ソノミ、壁の上の方に掛かっている、古ぼけた鍵を指差す

古ぼけた鍵のアップ

博（おっと）「ん、これか？これは鍵っていうんだ」

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ソノミ(ott)「鍵？」

ソノミの顔のアップ、何かに気付いたような様子

ソノミ「ねえ、ヒロシ。私、だいぶうまくなったでしょ？今度は外にも連れてって」

博「外？」

ソノミ「ねえ、いいでしょ」

博M「外か。もうそろそろ大丈夫かな」

博「そうだな。分かった。じゃあ、今度の土曜日に行こうか」

ソノミ「わーい。ソノミ、嬉しい。ヒロシ、ありがとう」

ソノミ、笑顔で博に抱きつく

博「はははっ、ソノミ、よせ。よせよ」

博M「よし、うまくいった。今度は大丈夫だ」

博、ハッと気付いて

博「今度は？今度って、何のことだ？」

○【アイキャッチ】

○ 博の自宅・玄関前(朝)

ソノミ、女物の活動的でカジュアルな服装をしている。ただし、ちよつと野暮ったい

よく見ないとロボットだとは分らない
ソノミ「わーい。お出かけ、お出かけ、嬉しいな」

それを笑顔で見守る博

○ 洋品店の店内(回想)

恥ずかしがりながら、女物の衣類を購入している博

○ 博の自宅・玄関前

博M「あーっ、恥ずかしかった」

ソノミ「(はずんで)すてきな服、ありがとう。ソノミ、嬉しい」

ソノミ、笑顔

博「苦労したんだぞ。よかったな」
ソノミ、笑顔で

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ソノミ「うん」

博「じゃ、そろそろ出かけようか」

ソノミ「うん」

ソノミ、博の腕にしがみ付いて笑顔で出かける

○ 新治市・繁華街（日中）

現在の世界とほぼ変わらない街中の風景
休日で、多くの人たちが街に出ている
ただし、どこかこざつぱりしている。まるで、記憶を頼りに描いた町並みのような

ソノミ「すごい、すごいね。人がいっぱい」

博「そうだね。今日は休みだし」

* * *

街中をあちこち歩きながら、いろんなものについて質問するソノミ。それに何とか答える博

* * *

ソノミ「ねえ、あれは、何？」

六脚自動歩行椅子（車いすの車の代わりに、3組6本のロボットの脚を持ったもの）が、人を乗せて街中を普通に移動している

博「あれは六脚自動歩行椅子っていうんだ。昔は車いす、つてのがあったんだそうだけど、今はほとんどがこれに変わったんだそうだ。車いすは段差や階段なんかがあると使えないから、バリアフリーとかいって、家や町中を平に改造しよう、っていう運動があったんだって」

ソノミ「へーっ、随分無茶苦茶なことしようとしてたんだね」

博「今は、この、六脚自動歩行椅子や、ほら、あそこに見えるパワードレグなんかがあるから、町全体みたいな、環境全部を改造しようってことは、必要なくなっただ」

パワードレグ（人の脚に装着して、脚の筋力の補助をする器具）をしている人

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

を指差す

ソノミ「ふーん」

博「まあ、こういうのが出来たのも、ロボット工学が今のよう発達したせいでもあるんだけどね。そしてソノミが出来たのも」

ソノミ「そうなんだ。ソノミも…」

博M「そう、ソノミはそのロボット工学の結晶。いや、多分今の最先端の技術でも無理のはずだ。それがなぜ…」

ソノミ「(嬉しそうに)ロボット工学って、すごいんだね」

楽しそうに歩いているソノミを眺めながら

博M「良かった。ソノミを連れてきてよかった。あんなに楽しそうにしている…。でも何だ？この懐かしさは？なぜか昔から知っているような気がする…。昔から…」

○ 新治市・住宅街(夕方近く)

博とソノミ、一緒に歩いている

博「ソノミ、外の世界はどうだった？楽しかったかい？」

ソノミ「うん！とっても楽しかった。ヒロシ、今日はありがとう」

ふと立ち止まって

ソノミ「ねえ、あれ、何？」

ソノミ、北の彼方の山の方向を指す

博「え、どれどれ。あれは、山だな」

ソノミ「やま？山っていうの」

博「そう、山。確か名前は…」

山を見つめながら、何かを思い出すソノミ。突然

ソノミ「ね、行こう。あの山に行きたい」

博「え、山に行きたいの？何で？」

ソノミ、博の腕を掴んで揺する

ソノミ「ねえ、行こう、行こう。行きたいの。どうしても」

博「どうしても？」

ソノミ「そう、どうしても」

博、少し考える様子。ソノミ、その様子

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

を覗き込む

博 「わかった、わかったよ。でも、今日はもう遅いから、明日にしよう。明日の朝、出かけることにしよう。それでいい？」

ソノミ、喜んで

ソノミ「うん、それでいい。行こう、行こう、明日の朝、あの山に行こう！」

喜び回るソノミを眺めながら

博M「それにしても、ソノミのやつ、何で突然、山なんかに行きたがつたんだろう。あの山に何かあったかなあ？あの山に……。あの山？何だろう……。何か大切なことがあったような……」

○ 博の自宅前（朝）

ソノミ、昨日とほぼ同じ服装

博、背中に小さな袋（リュック）を背負っている

博 「じゃあ、出発しようか。山までは少し遠いから、路面電車に乗っていくよ。いいかい」

ソノミ「わーい。ソノミ、路面電車、初めて」

と、子供のように単純にはしゃぐ

博 「さ、いくよ。もたもたしてたら置いてくからね」

と、歩き出す

ソノミ「ちょ、ちよつと待ってえ、ひろしい」と、小走りに後を追う

○ 新治市・住宅街（朝）

博、はしゃぐソノミとともに、最寄りの路面電車の停車場まで歩く

嬉しそうなソノミの姿を見て

* * *

フラッシュバック

同じような状況の映像。ただし、ソノミの代わりに園美（こ）がいる。同じように活動的でカジュアルな服装をしているが、どこかお洒落な感じ。今度は顔ははっきりと見える。ソノミとは基本的に別人

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

なのだが、どこか雰囲気似ている

* * *

博M「えっ、何？今のは誰？」

と、軽く驚く

○ 路面電車の停車場前へ車中（朝）

路面電車を待つている2人。他に客はいない

停車場に路面電車が入ってくる

博「ソノミ、さ、これに乗るぞ」

嬉しくて落ち着かないソノミ、それに反応して

ソノミ「はい。わかりましたあ」

電車に乗り込んで、窓際の席に2人で座る。他の乗客はまばら

ソノミ「わーい。ソノミ、電車初めて。嬉しいな」

と、はしゃぐ

博「（小声で）おいおい、嬉しいだろうけど、そんなに騒ぐなよ。恥ずかしいから」と、ソノミに耳打ちする

ソノミ「（小声で）はい。分かりましたあ」

と答えて、失敗した、という仕草

博、やれやれという仕草

* * *

博とソノミ、車窓から過ぎ行く風景を眺めている。窓が少し開いていて、ソノミの髪（スポーティなショート）が風になびく

* * *

フラッシュバック

同じような風景。ソノミが園美（ユメ）に変わっている。園美の髪（セミロング）が、やはり窓から入る風になびく映像

* * *

はっとして軽く驚く博

博M「え、まただ。何だろう。これがいわゆるデジャビュ体験というやつなんだろうか？こんなデートなんてしたことないのに……（驚いて）え、デート？」

博、少し顔を赤らめる

ソノミ、それには気付かず、楽しそうに
車窓から外を眺めている

○ 山麓の停車場(午前中)

電車から降りる2人。他に降りる人はい
ない。やがて、走り去る電車

山を眺める2人

博 「さ、ここからは大変だけど、歩くぞ。

大丈夫か、ソノミ？」

にっこり笑って

ソノミ「うん、大丈夫」

うなずいて

博 「よし、じゃ、行こうか」

登山道入り口に向かって歩き出す2人

○ 登山道にて(午前中)

山道、ただし、それほど険しい訳ではな
く、軽いハイキングに最適な感じの道
ほとんどデート中のような、2人が歩い
ていく

笑顔で

ソノミ「確か、こういうの、ハイキングって
いうんだよね、ヒロシ？」

博 「そうだね、ハイキングだね、これは」

博 M「そして、これじゃ、まるでデートだな」

* * *

フラッシュバック

同じような風景。やはりソノミが園美

(ママ)と入れ替わっている風景

* * *

博 M「まだだ。何なんだ、この感じは？この
山にハイキングになんか来たことないはず
なのに。ましてデートなんか…」

と、歩きながら軽く考え込む博

○ 登山道・分かれ道(お昼近く)

枝道がある分かれ道に差し掛かって

ソノミ「あ、こっち。ヒロシ、こっちに行こ
う」

と、枝道の方角を指し示す

博「え、どうしたんだ？ハイキングコースはこっちだぞ」

と、太い道の方を指し示す

ソノミ「いいの。ソノミ、こっちへ行きたいの。いいでしょ」

と、駄々をこねるソノミ

少し考えて

博「分かった。じゃ、ちょっと試してみようか」

ソノミ「わーい。行こう行こう。ありがとう、ヒロシ」

と、嬉しそうにはしゃぐソノミ

一行、枝道に進み始める

博M「ソノミも仕方ないなあ。あれ？でも何だ？この道、知っている気がする…何故だろう？」

枝道を歩く一行

○ 登山道・枝道・坂道の下へ洞窟近く

一行、ゆるい坂道を上りながら

博M「確か、この坂道を上りきいたら右手に緩やかに曲がっていて、そしてやがて左手に洞窟が見えて…」

本当に、上りきつて右に緩やかに曲がり、少し進むと左手に洞窟が見えてくる

博、驚いて

博M「え、何？本当に洞窟がありやがった！」

洞窟を見つけたソノミ、指差して

ソノミ「あそこに行こう。あの洞窟に」

○ 洞窟近く(昼過ぎ・回想)

夕立が降っている。時々雷鳴

道を小走りに走る博と園美(17)

園美「雨、降ってきちゃったね」

博「まずいな。これじゃ濡れて風邪引いちゃうよ。とりあえずどこかで雨宿りしなくちゃ」

洞窟に気付き、その方向を指して

園美「あ、あそこに洞窟があるよ。とりあえ

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

「ずあそこに行かない？」

博 「よし、そうしよう。走るぞ！」
洞窟に向かって走り出す2人

○ 洞窟近く(回想から戻る)

ソノミ、心配そうに博を覗き込みながら
ソノミ「ひろし？ひろし。大丈夫？」

博、はつとして気付く

博 「あ、ああ。大丈夫だ。どうした？」
安心して

ソノミ「良かったあ。ねえ、あそこの洞窟に
行ってみようよ」

と、洞窟を指差す。博、洞窟を眺めて

博 「ああ、分かった。行ってみよう」

洞窟へ向かって歩き出す一行

○ 洞窟前

一行、洞窟の入り口の前にたどり着く

博 M「確か、この中に、古い祠があったんだ
よな」

○ 洞窟内・入り口付近(祠の前(回想))

外は雨。時々雷鳴が聞こえる

博と園美(ヒメ)が洞窟内に入ってくる

園美「ふーっ、これでとりあえず雨宿りは出
来るね」

博 「そうだな。助かったぜ」

園美、辺りを見回す

奥の方を指差して

園美「あれ？奥に何かあるみたい」

洞窟の奥に進む2人

博 「これって、祠、だよな？」

園美「多分、そうね。大分古いものみたいね」

洞窟の入り口から5メートルほど奥、行
き止まりに、古びた祠がある。祠の扉の
前に、何か光るものが

園美「あれ？何かしら」

祠に近づいてよく見る。古びた鍵を見つ
ける

博も近づいて

博 「鍵、みたいだな。随分古いもののようにだけ。古い型だし、錆び付いているみたいだな」

園美「どこの鍵かしらね？」

園美、鍵を手にとって振り返る

園美「ねえ、この鍵。貰っちゃわない？」

と、不敵に笑う

博 「そんなことして大丈夫か？大体、そんなもの拾ってどうするんだ」

園美「大丈夫よ。これ、宝物にするの。私たち二人がここで出会った記念。二人だけの秘密」

と、笑顔を見せる

突然、とりわけ大きな落雷音が轟く

園美、驚いて咄嗟に博に抱きつく

園美「きゃっ！」

抱き合ったまま無言で見つめ合う二人

やがて、どちらからともなく顔を寄せ合うて、キスしようとする

二人の唇がふれあう直前

。 洞窟前（回想から戻る）

物思いに耽る博。その顔のすぐ側で心配そうに博を覗き込むソノミ

ソノミ「ひろし、ひろし？」

はっとして、気付き、ソノミと目を合わせ、慌てて離れる二人

気まずそうに、少し顔を赤らめて

博 「だ、大丈夫だ。ちょっと考え事をしてただけだ」

少し残念そうなソノミ

ソノミ「ねえ、中に入ってみようよ」

一瞬考えて、そして迷わず

博 「ああ、そうしよう」

。 洞窟内・入り口付近

ソノミと博、洞窟内に入ってくる

ソノミ「ちよつと暗いね」

* * *

イメージ

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

白板に次の文字が手書きで書いている
『SONOMI: Self-Organized Neuro
Optimizing Mental Interface』

* * *

ソノミ、奥に何かを見つけて
ソノミ「なんか奥にあるよ？行ってみよう」
ゆつくりと奥に進む2人

* * *

イメージ

大学の研究室。機械に囲まれた作業台の上
に、人形等身大のロボットが仰向けに寝か
されている。ロボットの頭にヘッドギア。取
り囲んで博(32)、園美(32)、穰(32)が何か
を激しく話している

* * *

博、決意の顔

洞窟の奥からかすかな光が

ソノミ、祠をみつける

ソノミ「あ、何かあるよ。これは、何？」

博「それは、祠だ。古びた祠…」

博、祠から漏れる光を浴びて…

○ 大学の研究室(回想)

博(32)、園美(32)、穰(32)がいる

ロボットが暴走して勝手に動いている

警告音が辺り一面鳴り響く

穰「だめだ。筋力制御リミッターが正常に働いていない。これでは人の力くらいでは、こいつは止められない。パワードスーツを装着した奴でもなければ。待ってろ、今援軍を呼んでくる」

穰、計器盤の前から立ち上がり、慌てて

研究室から出て行く

園美(ott)「きゃーっ」

暴走したロボットが、園美に今にも襲いかかるうとしている

博「ま、待ってろ、園美」

頭にヘッドギアをつけている博、目をつぶって集中する

博「…ダメだ。やっぱりコントロールでき

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

ない。(叫んで)園美！」

○ 洞窟内・祠の前(回想から戻る)

博(17)、力なく座り込む

博「(力なく)おれは、おれはアイツを、園美を傷つけてしまった。…園美を守れなかった」

ソノミ(off)「(別人のように)違う、違うわ。それは誤った記憶。…本当のあなたは、そんなことはしていない」

ソノミ、博に駆け寄ってしゃがむ

博の肩をつかんで引き起こす

ソノミ「(力強く)思い出して。本当は、あなたは何をしたのか…。思い出して。あなたと、園美さんのために」

博、うつむいて

博「でも、俺は、俺は…」

ソノミ、博の顔を覗き込んで

ソノミ「大丈夫。何も心配はないわ。…私を信じて」

ゆっくり顔を上げてソノミの顔を覗き込む博

ソノミの顔にオーバーラップして、園美(17)、園美(22)、そして園美(32)の笑顔が映る。それに合わせて

ソノミ(off)「(幻想的に)私を信じて。私を信じて。私を信じて…」

博、決心して決意の顔で祠に近づく

祠の扉から、明るい光が漏れている

博、意を決して祠の扉を開けようとするが、鍵がかかっていて開かない

博「ん、どうすれば…そうだった」

上着のポケットをまさぐり、古ぼけたあの鍵を取り出す

そっと鍵を扉の鍵穴に差し込み、ゆっくりと回す

ゆっくり扉を開けると、中から目映い白い光が辺りを包み…

○ 大学の研究室(回想)

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

博(32) 園美(32)がいる

ロボットが暴走して勝手に動いている
警告音が辺り一面鳴り響く

園美(off)「きゃーっ」

暴走したロボットが、園美に今にも襲いかかるうとしている

博 「ま、待ってろ、園美」

頭にヘッドギアをつけている博、目をつぶって集中する

博 「…ダメだ。やっぱりコントロールできない。(叫んで) 園美!」

咄嗟に飛び出し、園美をかばう博

辛くも退けるが、ロボットの攻撃を受けて、気を失う博

暗転

園美(off)「博、(絶叫) ひろしー!」

*回想ここまで

○ 大学病院の病室(日中・現実世界)

*博(32)の目から見た映像

暗転。素早く画面全体が黒から真っ白になる。徐々に明度が下がり、通常の画像になる

病院の天井の映像

*博の目から見た映像ここまで

博、病室のベッドに仰向けで寝ている

頭にヘッドギアのような器具をつけ、そこから伸びる何本ものケーブルが、近くの機械につながっている。側に透析装置のような機械もあり、博の腕にチューブが伸びている

博、目を覚ましている

周りを見ようとすると、頭の器具が邪魔でうまく動けない。それを見て、素早く穰(32)がやってきて、頭の器具を外す。博の腕のチューブを外す間に、博は周りを見回す

博の頭の器具から伸びたケーブルにつながった同じ機械から、別のケーブルが伸び、隣のベッドに伸びている。ベッドに

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

は園美(31)が眠っており、頭にはあのヘッドギアが装着されている

穰 「気分はどうだ？博」

博 「(つぶやくように)長い夢を見ていたみたいだ…」

穰、笑顔で

穰 「そうだ。お前は長い夢を見ていたんだ」

穰、真顔に戻って

穰 「博、お前は事故で昏睡していたんだ」

○ 大学の研究室(回想)

大学の研究室。機械に囲まれた作業台の上に、人形等身大のロボットが仰向けに寝かされている。ロボットの頭にヘッドギア。取り囲んで博(32)、園美(32)、穰(33)が何かを激しく話している

穰 N「あの日、お前はロボットの起動試験をしていた…」

穰 「もう一度考え直せ、博。学会発表までいくら時間がないからって、無茶だ」

博 「大丈夫だ。俺の開発したこの、精神同調装置、SONOMIを使えば、うまくコントロールできるはずだ。俺を信じろ！」

穰 N「お前も知っているように、精神同調装置 SONOMI は、ニューラルネットで動く人工脳と、人間の脳の間を意識を同調することが出来る。それによって、人工脳のモニタリングやコントロールが出来る。あのロボットもコントロールできるはずだった。しかし…」

* * *

ロボットの起動試験を始める

穰 N「お前は皆の反対を押し切り、時間短縮のため、ロボットの個別試験をパスして、いきなり全体起動試験を強行したんだ。その結果、あの事故が起きた…」

○ 大学病院の病室(回想から戻る)

穰 「事故で昏睡したお前は、一週間経つても目を覚まさなかった…。外傷は軽いもの

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

で、いろいろ調べてもその原因は分からなかった。恐らく、精神同調装置の副作用による、意識の逆流の影響もあったんだろう。とにかく、このままでは衰弱死も考えられた」

○ 大学病院の病室（回想）

病室で園美が博の精神内に突入する準備
園美、眠っている博の手を取り、見つめる

隣のベッドに横になり、装置を装着する
穰、機械の操作をする

園美、目を閉じるアップ

穰 N「そこで、精神同調装置、SONOを改造して、逆にお前の意識の中に潜り込んで救出するという案が出された。装置の改造が済んで、いざ、実行という段になり、誰がそれを行うかということになった。そんな時この危険を伴う任務に志願したのが、園美さんだったんだ。3日前のことだ。

○ 大学病院の病室（回想から戻る）

穰 「そして今日、お前が帰ってきた。あれから1ヶ月ぶりに」

隣のベッドで園美（S）が目を覚ます

素早く装置を外す穰

ベッドから起き上がる園美

博の方を見て笑顔で

園美「あ、博君。戻って来れたのね。よかった」

博、起き上がろうとするが、力が出ず起き上がれない

穰 「無理をするな、博。お前は一月も眠っていたんだ。体の筋肉が弱ってるんだ」

博 「そ、そうなのか…」

園美の方を向いて

博 「園美、ありがと。何か大変世話になったような気がする…」

園美「はつきりとは覚えていないのだけど、あなたは向こうの世界でロボットだった私

「自動人形(オートマタ)は機械仕掛けの夢を見るか」

を、優しくコーチしてくれたみたいね。そのおかげで動けるようになって、本来の目的を思い出した私は、こうしてあなたを目覚めさせることができた」

園美、立ち上がった博のベッドの側に来て、笑顔で

園美「今度は私があなたの面倒を見るわ」

* * *

六脚自動歩行椅子に乗っている博。その後ろに立ってサポートする園美
病室の扉を開け、廊下に出て行く
廊下の奥から明るい光が差し込んで、2
人を包んでいく

○ 【エンドロール】

博、園美、二人のリハビリシーン
最後に、明るい部屋。窓際に木製の机がある。机の上にズームインすると、あの古ぼけた鍵が、置いてある

○ 【おわり】